特集 泉谷の棚田物語

「日本の棚田百選」に選ばれている、泉谷の棚田――。
手入れの行き届いた美しい姿は、多くの人を魅了しています。
しかし今、この棚田が後継者不在という課題を抱えているのをご存じですか。
そして、この課題を解決するために地域の人たちが頑張っていることを――
10年・20年先の棚田はどんな姿になっていくのか、
多くの人に考えてほしいと思い、棚田の「今」をお伝えします。

泉谷の棚田「雨上がりの朝」

豊かな水の里「泉谷」

豊かな泉に育まれ、昔ながらの農村景観を守り続けている泉谷の集落。
先人たちが少しずつ造り上げた棚田は、平成11年に「日本の棚田百選」に選ばれました。
日本の原風景といわれる棚田――。その魅力を紹介します。

心のふるさと「泉谷の棚田」

五十崎御祓地区にある屋根付き橋。その先の三差路を右に曲がり、車で15分ほどあがると、狭い山あいの急斜面に「ぱっ」と美しい棚田が広がります。ここは泉谷の棚田――。大森山の中腹、標高約500メートルに位置し、大小さまざまな95枚の田んぼが並んでいます。平成11年には農林水産省から「日本の棚田百選」に選ばれました。

泉谷の棚田の特徴は、急な斜面に造られていること。農水省は傾斜度が20分の1（水平距離を20メートル進んで1メートル高くなる傾斜）以上の水田を棚田と認定しています。泉谷の棚田の傾斜度は3分の1。棚田百選に選ばれた棚田の中では、1・2位を争う急勾配です。

棚田の「なんで?」

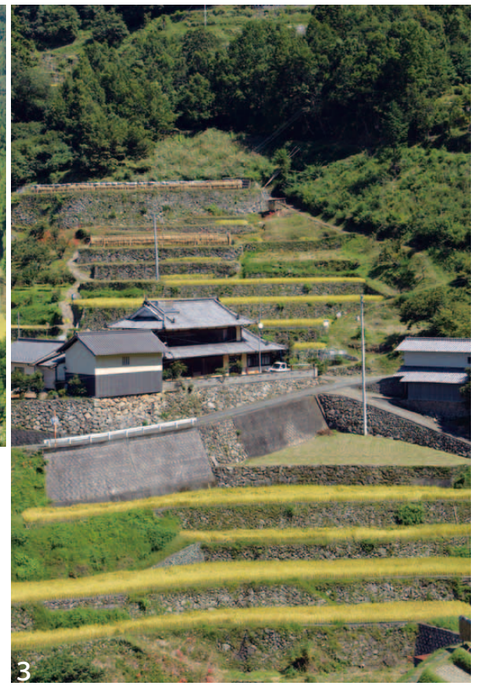
こんな急勾配の土地に、なぜ昔の人たちは大変な思いをして棚田を造ったのでしょうか。愛媛大学農学部准教授の武山絵美さんは「棚田は地滑り地域にできることが多い。理由の1つは稲作に必要な水が容易に集まること。もう1つは機械がない時代では、地滑りが起きた場所を整地して水田にするのが効率的だったこと。泉谷の棚田も同じと想像できる」と推測します。

不思議な「大清水」

地元で「大清水」と呼ばれる湧き水があります。言い伝えでは、どんなに日照りが続いても、何百年間1度も枯れたことがないそうです。不思議なのは、その位置と水量。泉谷地区がある大森山は標高約700メートルで、泉谷地区から山頂まではそれほど距離はありません。山頂から泉谷地区側の斜面に降る雨の量に対して、明らかに水量が多く、地元の人は口をそろえて「不思議や」と言います。また水温は常に一定で、水量は大雨が降ったときでも、急激に増えることはないそうです。

多くが謎とされる「大清水」ですが、この豊かな水が泉谷の棚田を育み、美しい山里の生活を支えています。

【謎の多い大清水】
1_棚田の水車小屋横の小川。大清水が流れている。この日は、大雨が降った翌日だったが、水量はそれほど増えてないように見える　2_大森山と棚田。昔はもっと山の上の方まで棚田があったが、それでも十分な水を確保できていた

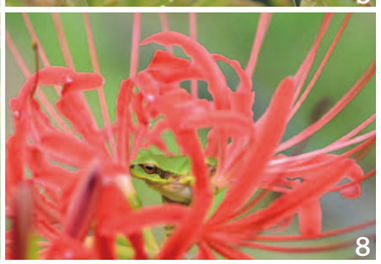


【なぜ2種の土はがあるのか】
3_山頂に向かって左側の斜面。きれいな石積みが何段も重なる　4_同右側の斜面は土の法面。田んぼの形が石積みよりもやわらかく見える
※地元の人の話では、造った人が違うことや、左側の斜面の方が勾配がきついからという理由が挙がっていた。また左側を主に所有している清水さんの祖父が、高い石工の技術を持っていたとの話もあった。

魅力がいっぱいの棚田

全国の棚田には、土と石積みの2種類の法面（土は）があります。泉谷の棚田は川を挟んで2つの斜面があり、斜面によって土と石積みの法面が見られます。どちらも味わい深い景観で、泉谷の魅力の一つです。

棚田は米を生産する場としてだけでなく、土木技術や生態系保存の面などでも注目が集まっています。また、古くから続く稲作によって形成された風景は、日本の原風景ともいわれます。見ているだけで安らぎを感じる泉谷の棚田には、たくさんの魅力が詰まっています。



【棚田の魅力】
5_地域の人が植えたシャクナゲ　6_朝露にぬれる稲穂。黄金色に色づきはじめ、収穫の時を待っている　7_棚田を歩くサワガニ。トンボやバッタなども多く、棚田は生き物が集まる豊かな環境　8_カエルは彼岸花の中で休憩中　9_秋にはコスモスが揺れている

【棚田の現状】 1_数年前は棚田だった場所。管理者がいなくなるとすぐに荒れ果てた　2_稲木用の竹を運ぶ上岡さん　3_小さな機械しか入らない棚田　4_棚田に水を送る竹の水路。水の管理は経験も必要　5_手入れができない石積みは、大きな草が生えて壊れる危険もある　6_泉谷地区を出て、八幡浜市に住んでいる土居清春（きよはる）さん。棚田を荒らさないよう耕作を続けている

収穫の時期を迎え、一人で稲木作りをする上岡満榮さん

たった3戸の集落、直面する後継者問題

知ってほしい棚田の現状

棚田を見ると、誰もがその心癒される景色を残したいと思うはず――。しかし、農村部の過疎化や高齢化の進行は深刻で、その維持は困難なのが現状です。泉谷の棚田も同様に、後継者の問題に直面し、棚田をどのように次の世代に引き継いでいくかが大きな課題になっています。

泉谷の棚田・約4ヘクタールを日常的に手入れしている農家は、わずか3戸。どの家庭も後継者がなく、高齢者が中心になって大変な棚田の農作業をしています。

「泉谷地区棚田を守る会」の活動などで棚田ファンが増え、知名度も上がりましたが、後継者問題の出口はいまだに見えていません。

祖先から受け継いできたものを守りたい――。その思いで、今も踏ん張っている皆さん。しかし限界は確実に近づいています。棚田の現状を知り、私たちが力になれること、少し考えてみませんか。

祖父が造った棚田。守りたいけれど維持が難しい――

清水　善二郎（ぜんじろう）さん（78）

祖父が棚田を造り始めたと聞いているので、おそらく150年くらい泉谷で米を作っていることになります。祖父たちが棚田を造っている姿は覚えています。当時は機械なんかないので、石積みの石は掘って出たのを使っているし、大きい石がでたら発破で割るのを見ていました。

これまでなんとか守ってきましたが、維持が大変になってきました。石垣の草引きも自分でしてたけれど、今はもうできなくなってしまいました。

うちの田は機械が入るし、畦（あぜ）をコンクリートで塗って作業しやすいようにしているけれど、それでも続けるのは難しいです。息子たちは戻らないので、見えない棚田は止める方向で検討しています。

棚田を荒らしてはいけない、その思いが頭から離れない

泉谷地区棚田を守る会会長　上岡　満榮（みつえ）さん（71）

棚田は水の管理が大変。大雨のときは、水を逃がすために畦（あぜ）を切らないといけない。夜中でも頭にライトを付けて、畦を切りに行きます。そうしないと雨水が畦を越して、土砂崩れの元になるからです。

草刈りも、これだけの広さになるとかなりの重労働。農業だけなら年に2～3回刈ればいいけれど、景観保全のため、6回は草刈りをしています。石垣の草抜きもあるので、年を取るごとに難しくなっています。

やはり後継者がいないことが一番心配――。棚田が荒れていくのは、今までやってきたことが無駄になってしまう。若い人に住み着いてもらうのが一番いいけれど、きちんと管理できるかどうかという問題もあります。棚田は普段の世話が難しいし、かなりの手間。平地の田んぼでは、全部機械でできるから、田んぼに入らないで米を作る人もいるそうです。棚田は平地の5・6倍の手間がいります。でも収穫量が少ないので、もうけにならない――。

でも、いいこともあります。昔は棚田の米なんかいらないと言われ、売れないときもありました。今は品種が良くなり、手間を掛けて作る分、棚田米の品質は高いといわれます。泉谷の大清水や寒暖の差も手伝って、よりおいしい米ができます。多くの人が「うまい」と言って食べてくれる、それが農家にとって一番の幸せですから。

私の家系では、子どもが一人できるごとに一枚の田をこしらえてきました。厳しい父の教えを守ってきたので、棚田を荒らしてはいけないという思いが頭から離れません。祖先から受け継いだものを、なんとか残さなければという思いでやっています。大変だけれど、ずっと守っていきたいです。

「まだ諦めない」頑張る棚田の一筋の光り

「今のうちにできることは何でもやっておきたい――」

大きな課題を抱えながらも諦めず、棚田を未来へ残す方法を模索している「泉谷地区棚田を守る会」の皆さん。地元の御祓自治会も協力して、さまざまな活動を展開しています。

平成16年には「棚田オーナー制度」を導入。これまで延べ140組の人たちが参加して、田植えや稲刈りなどの農作業を手伝いながら、地域との交流を深めています。平成17年からは、棚田の景観をもっと良くしようとシャクナゲの植栽を始めました。地元住民などの寄付を受け、これまでに約1300本のシャクナゲを植えました。27年には「泉谷棚田しゃくなげ祭り」を初めて開き、多くの人でにぎわいました。

その他、毎年約50人が参加する自然浴ツアーや地元小学生の農業体験なども行うなど、交流活動に力を入れています。

もう一歩だけ前へ

27年度からは、棚田米を使った新しい取り組みを始めました。一つは米俵の販売。もう一つはふるさと納税の活用です。棚田米の価値が上がり、生活できるだけの収入が得られるなら、大変な農作業でもやってくれる人が出てくれるのではないか――。上岡さんたちは、そう期待しています。

「やれることは、やらなければ」また一歩、力を振り絞って前に進みます。

4月に初めて開かれた「シャクナゲ祭り」。にぎやかな会場

「泉谷地区棚田を守る会」の皆さん、イベントごとに行う会議

【写真】棚田で行っているイベント

未来へ向かって、棚田を守る新たな取り組み

ばあちゃんが作る米俵で棚田米を贈答用に――

土居ナミ子さん(85)

役場の人に小さい米俵作ってと言われて「何が始まるか、ようわからんわ」言うて笑ったことよ。昔やってたことは、よう覚えとるけん、世話無しに編めたけど、小さいのは仕舞いが難しいけん、1日に4～5個しか作れんのよ。

昔はどの家にもわらを編む道具があってな、小さい頃から手伝わされて「勉強なんかするな」言うて怒られよったんよ。小学校4年の頃に初めて自分の草履を作ったい。誰も教えてくれんけん、見よう見まねで作って、ムカデみたいな草履を履いてたなぁ。昔は稲のわらが貴重やって、何でもわらで作ってたけれど、今になって役に立つなんて、面白い話やね。

＼ご贈答用に／

【問い合わせ】
町並・地域振興課
グリーンツーリズム係
☎0893(44)2114

ふるさと納税で棚田を応援してください

ふるさと納税の返礼品として、9月から「泉谷の棚田米」を選ぶことができるようになりました。ふるさと納税は「納税」という言葉がついていますが、実際には自治体への「寄付」です。寄付先は出身地に限らず、自分が応援したい自治体を選びます。寄付いただいた人に「泉谷の棚田米」を進呈することで、地域の活性化につながることが期待されます。また、これから寄付金の使途に棚田などを守る項目を加え、棚田を応援してくれる人の思いを、そのまま棚田に使えるよう検討しています。

大清水が育んだ希少な棚田米を、ふるさと納税の返礼品に選んでもらうよう、ぜひ親類や友人の皆さんにお勧めください。

棚田米の感動をご自宅で!

【問い合わせ】
総務課　政策調整班
☎0893(44)6151

7月には「かかし作りコンテスト」が行われる

5月には棚田オーナーが集まって、田植えを行う

自然浴ツアーで披露される「御祓豊年踊り」の一場面

秋、米、人、実る―。

「秋の棚田が一番好き」と言う上岡満榮さん。稲穂が黄金色に輝いて収穫の時期を迎えると、1年の苦労が喜びに変わると笑顔を見せます。

9月13日は棚田オーナー制度に参加する8グループ・25人が集まり、収穫作業の手伝いをしました。田おこしから参加し、田植えや草刈りもしたので、喜びもひとしお。稲刈りや稲を天日干しにする大変な作業にも、笑みがこぼれていました。

上岡さんは「オーナー制度が始まった当時は、畦が壊れたり、苗を植え直したり大変だった。今はみんな上手になって、作業も早い。本当に助かる」と、その成長を喜びます。

オーナーの皆さんは上岡さんや奥さんの淳惠(じゅんえ)さん、地元の人たちの人柄に触れ、ますます棚田を好きになっています。棚田を守る難しさを理解する人も増え、平成16年から続いている交流が、実を結びつつあります。後継者問題の解決までには至りませんが、泉谷の棚田を未来につなぐ、大きな一歩です――。

棚田の収穫作業に参加した皆さん

1_地域おこし協力隊の渡邊智彦(とものひこ)さん。棚田に関わる若者の背中が頼もしい
2_稲刈りの様子。慣れた手つきで作業をする子どもたち　3_うれしそうに作業する参加者　4_稲を下の段に投げる連携作業
5_昼食は棚田米のおにぎり。「おいしいー」

棚田大好き！

棚田オーナーの皆さんからの
――応援の声――

棚田オーナー・愛媛大学メディアサポーター出版部の皆さん

愛媛大学3回生
谷　誠時(せいじ)さん

棚田の魅力を雑誌で伝える

小田出身ですが、泉谷の棚田は名前を知っているだけでした。棚田に来るようになり、自分が知っている内子町の魅力が1つ増えました。昔ながらの作業をみんなですると、祭りの原点を感じて楽しいです。こういう農作業が残っていること自体がすてきなことだと思いました。

自分には情報雑誌の会社に入って、人を紹介する雑誌を作りたいという夢があります。その夢をかなえて、棚田やここで暮らす人の魅力を多くの人に伝えたいです。

愛媛大学4回生
亀田　真美(まみ)さん

「守りたい」思いは同じ

香川県での就職が決まり、出版部でオーナー制度に参加するのは、最後になります。

棚田に来るとほっとした気持ちになれました。上岡会長やお母さんに会えるが楽しみだったので、あまり来られなくなると思うと寂しいです。棚田を維持するのは大変ですが、営みも景色もこのままであってほしい――。この場所がなくなってほしくないです。

邪魔かもしれないけれど、ふらっと香川県から遊びに来たいと思います。

㈱コトバの森
串部　公基(こうき)さん

10年間は棚田に通いたい

棚田に興味があり、5年前から学生を連れて棚田オーナー制度に参加しています。場所も人もいいので、棚田を好きになる学生がたくさんいます。自分もその一人です。

50歳の誕生日に、10年間棚田に通うという目標を立てました。もっと農業を学ぼうと、熟年者の農業講座も受けています。棚田は管理を怠ると、すぐに荒れます。ごまかしが利かない世界で頑張っている地域の人たちを、これからも応援したいです。

棚田オーナー・橋本さん一家

橋本典明さん、恵美(えみ)さん、青明(はるあき)くん
和奈(かずな)ちゃん

棚田はもう一つのふるさと

棚田は自分の田舎みたいで大好きです。水がきれいで、そのまま飲んでも大丈夫――。生き物もいっぱいいるので、棚田は人にも生き物にも大切な場所だと思います。1年間通して棚田に関わって、住んでいる人たちの苦労を感じました。上岡会長さんは70歳を越えても守り続けていてすごいです。一人では続けられないので、棚田がどうなっていくか心配しています。荒れたら大変なので、若い人たちにも協力してほしいです。

橋本　青明(はるあき)くん

東京からも応援しています

今は私だけ東京都に住んでいますが、収穫を楽しみにしていたので戻って来ました。3年前に転勤で東京から松山市に来たときから、都会育ちの子どもたちに農業体験をさせてあげたいと、棚田オーナー制度に参加しています。長男が夏休みの自由研究で棚田を調べるなど、今では家族みんなが好きな場所です。棚田を守る大変さも知り、東京にいても会長たちのことが気になります。何らかの形で関わりを持ち続けたいですね。

橋本　典明(のりあき)さん

ここから始まる物語

貴重な棚田は泉谷地区の人たちだけでなく、内子町の宝物です。
この宝物を未来へ残すため、私たちに何ができるのか――。
「守ってほしい」という思いが「守りたい」に変わるとき、棚田の新しい物語の扉が開きます。

唯一無二の貴重な棚田――みんなで守る方法を選択してほしい

愛媛大学農学部
地域計画情報学研究室
准教授　武山絵美さん

調査で初めて泉谷の棚田を訪れたときは、本当に驚きました。全国的に耕作放棄地の問題が深刻で、残っている棚田でも所々に放棄地が見られるのが普通です。しかし泉谷の棚田は、見たことのないような急傾斜地にあるのに、手が行き届いている――。その美しさは、唯一無二と言っても過言ではないほど、珍しく貴重なものです。

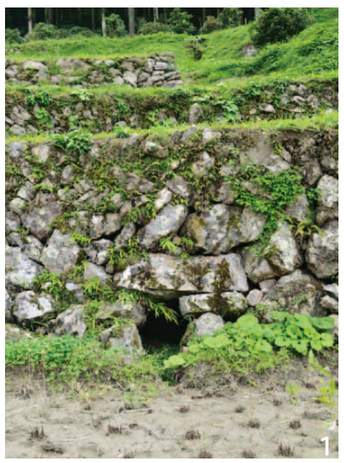
その素晴らしさが際立つのは、先人が造った持続可能な水田の仕組みと、地域の人たちの棚田に対する意識の高さです。

仕組みの特徴の一つは、石積みの技術の高さ。特に棚田の下に埋められた石の水路（暗渠）は、大雨のときなど、不要な水を素早く川へ逃がすことができます。災害を防ぎ、田を守るための先人の知恵です。

地域の人たちの素晴らしさは、草刈りにも現れています。雑草には法面を守る役目があるので、根っこを枯らすことはできません。でも日影や害虫の温床を作らないため、こまめな草刈りが必要です。いつもきれいな景色が見られるのは、地域の人たちの棚田に対する愛情が詰まっているからだと思います。

この棚田を次の世代へ残すためには、景観と農作業の「バランス」が重要なキーワードになります。機械が使えないことや作業に危険を伴うという状況を改善しないと、新しい担い手は見込めません。道路を広げたり、畦をコンクリートで固めたりすれば、景観は少し変わりますが、作業の安全性と効率は上がります。棚田の場合、農作業を続けないと景観を守れません。そのバランスをどうするか――。

今みんなで考え選択したことが、10年・20年後の棚田の姿になるのではないでしょうか。



1_黒い穴が暗渠。高い技術で石が組まれている
2_コンクリートで固めた畦　3_草刈りを手伝う串部公基さん。作業を手伝う人が増えている

この景色をずっと「守りたい」

「棚田を『美しい自然』と言う人もいるが、棚田は自然ではない。自然と戦いながら、共存しようとする営みが美しいんだ――」と、誰かが言いました。棚田と共につつましく暮らす上岡さんたちを見ていると、本当にそう思います。

収穫が一段落して、棚田を見つめる上岡さんが「自分たちの生活のためだけなら止めていたかも」と心境を吐露します。「守りたい」という思いは、いつしか多くの人の願いになり、それを背負っていたのです。

私たちの思いが「守ってほしい」から「守りたい」に変わるとき、新しい棚田の物語が始まります。